

# 幼稚園四十年(七)

戦前・戦後—昭和十二年—二十三年



## 菊池ふじの

たものであった。

外庭なども趣向をこらすようにくふうした。庭にお花がなくては殺風景だというので、園庭の中央に円形の花壇をこしらえた。そして、ここに、色とりどりのお花を植えて興を添えたり、砂場の一つを、砂をすっきりかき出してお池にし、噴水をつくったりして涼しさを出した。現在の中央の花壇はこのときの置きみやげである。その後、大きな円形の花壇が中央にがんばっていては、園児たちの運動に支障を来たすということで、円形の両側をちよんぎって現在のようにだ円形にしたのである。

この教育者会議は、どこどこを会場としたのか、各部門に分かれて諸所で会議が行なわれたものであるのか、また会議の内容はどういうものであったのか、先輩の私などは会議の全体

### 世界教育者会議—昭和十二年—

過ぎてきた道をふり返ってみるとき、世界教育者会議というのが、やはりどうしても頭に浮かんでくる。

世界教育者会議は、昭和十二年八月一日から十日までの十日間、東京において開催されたもので、わがお茶の水の幼稚園も展覧会場の一つになった。

夏休みをひかえて、幼児たちの作品や歴史に関するものなどを、一生懸命に製作したり選定したりし、今の川の組のお部屋に、「幼稚園の部」として陳列した。七月十日までにいっさいの準備を終えるようにとの計画で、毎日、会場づくりに専念し

計画などには関与しなかったもので、そうした会議の本筋の大切なものは何も知らなかったし、また知ろうともしなかったのであるが、そういう点については、立派なこの会の記録が残っているはずであるからそれを見ると明らかになる。

私にはこの会議の開会式前後のことが頭に浮かんでくるのである。八月一日の開会式は、東大の安田講堂で行なわれた。安田財閥の自家の安田家が寄贈されたと当時話題になっていた安田講堂には、あとにもさきにもこのとき一回入場したきりで、講堂内の有様などおぼろげにしか思い出せないが、私は二階の側面に着席したとおぼえている。さしもの大講堂もぎっしり満員、いろとりどりの国際色豊かな会合で、世界の教育者たちが、こうして一堂に会するというのに、何とはなしに、大きな感動を覚えた。大会の会長は小松という丸々した、どちらかといえば小柄な方だったが、流暢な英語で開会の挨拶をされたのをきいて、ああ、自分もあのように英語が自由自在に話せたらいいなあーと、思ったものだった。もっとも多数の外人が来日し、わが幼稚園も会場の一つであるからには、たくさんの方の外国人も見えることだと思つて、そのころ、一しきり会話の勉強をしたのではあったが、いざ実際に外人と立ち向かつてみると、第一、先方のいうことが聞きとれず、適当な言葉がとっさの場合浮かんでこないの、とうとうさじを投げてしまったもの

だった。英語専攻の日本の学生たちは、英語の辞書を片手に案内をしていた。あとで聞いた話だけれど、「日本の学生はむずかしい英語を使うので、かえって話が通じない」とある外人が語ったときいたが、私にも思いあたるものが何回かある。

このお茶の水の幼稚園には、その後といえども、いやその後ますます日本人はいうまでもないこと、いろいろの国の人が、日本を訪れると、日本の幼稚園も見て帰りたいといつて参観に来る人がたくさんある。これが近來いっそう頻繁になってきている。こんな状態であるから、この園に職を奉ずるものの一人士として、英語の片言ぐらひは話せなくてはと発心して、たびたび英語の会話の勉強をはじめたのであるが、やはり、ものにならずじまいである。小さいときから生活の中に身につけたものならいざ知らず、成長してからの、とつてつけたような勉強では、日常語として使うのでなければ、身につくものではないなあーと悲しいあきらめをもつてしまつてゐる。

この世界教育者会議の開会式場へ行くときのことに関連して、忘れられないことがある。それはちょうどこの頃、日中の関係が険悪になりつつあつたときで、日中戦争の導火線となつた蘆溝橋事件が勃発してゐたときであつた。この事件は、この年の七月七日に起こつたと記憶しているが、新聞には、毎日のように、彼の地にいる邦人の多数が、口に出してはいえない、

ひどい仕打ちを受けていることを、写真入りでことこまかに報道しているのがあった。当時の気候の蒸し暑さと呼応して、私はいいようなない憂鬱な心持になっていた。

開会式に向かう都電の中には、多数の外人もいっしょに乗り合わせていた。私は、この外人たちも、日本の新聞のことこまかな報道を、われわれと同じように読めるものと錯覚して、「この外人たちは、私たち日本人のこの憂鬱な気持、また私たちの同胞が彼の地で受けている惨虐な有様をどう思っているだろうか？」などと、腹立たしいような、また恥ずかしいような気持で向かい合い、会場近くの停留所で下車したのを思いだす。

### 日支事変——昭和十二年——

昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件に端を発した日支間の暗雲は、どんどん進行して、たちまち日支事変という戦争にまで発展した。

世界教育者会議を終えたばかりの第二学期の始業日には、身近な幼児たちの父親にも、四人ほどの出征者を救えるようになっていた。

かつての園児だった人の中にも、「出征いたします」といつて、挨拶に来園する若者も三、四名は出てきた。私たち職員の内

兄弟にも親せきにも出征軍人ができるようになり、戦争は私たちの身辺にもひしひしと迫ってきた。

幼稚園としても、こうした周囲には無関心な保育をつづけてはいられなくなった。

出征遺家族の慰問、陸海軍省への献金、戦地に行っている軍人への慰問品として、幼児画の手拭を染めぬいたり、幼児画の絵はがきを作製したり、幼児の製作になるカレンダーを作ったりして、食物や衣類などいっしょに慰問袋をこしらえて、戦地に送ったりなどした。

一方、幼児に向かつては、国家意識をもつように、との念願から、園庭には毎日国旗を掲揚するようになった。

倉橋先生の「日本の旗、日の丸の旗」はこのときに作詞され、同じ女高師の教授であった小松耕輔先生の作曲である。この歌ができたとき、全園児が園庭に出て、掲揚された国旗を仰ぎみながら、小松先生の指揮でこの歌を合唱したのを思いだす。

この年（昭和十二年）の十二月には南京の陥落があり、翌十三年の十月末には漢口の陥落があり、戦果は挙がってきているようで、その度に祝賀式や旗行列などが行なわれた。園児たちも本校の学生といっしょに、このような行事に参加したのであった。

戦果はあがっているようでも、国内では、金の地金の買上げ

が発表されたり、園のテラスの鉄棒や暖房の鉄管を献納することになったり、勤労に動員された学生たちから、動員にはなっても、資材が不足で仕事がなく、止むなく遊ばなければならぬのだというような話をきくと、果たして日本はこのまま勝ちおおせるものであろうかと不安にもなってきたのであった。

こうした国内の物資不足の折柄だから、戦争に使わなければならないものは、できるだけ節約しなければ、という考えから、この頃は日々の保育の材料にも、できるだけ廃物を利用することとした。包装紙の利用、新聞粘土の考案、古封筒や古葉書の応用など、あらゆる面で廃物を生かして使うことにしたものであった。

国内の拳国体制は強められ、物の節約と、身体の鍛練とに力点がかけられるようになった。

幼稚園でも、おべんとうをいただくまえには、みんなで「兵隊さん、ありがとう」ということにした。戦地でお国のために戦っている兵隊さんの労苦を、少しでも偲ぶようにという気持ちからだったと思う。

また月のはじめの日は国全体で「興亜奉公日」ということにして「日の丸べんとう」をもってくるようになった。「日の丸べんとう」というのは、ご飯の真ん中に梅干を入れただけで、おかずは節約したのだった。しかし園児たちのおべんとう

は「日の丸べんとう」だけというのはほとんどなかった。やはり、育ち盛りの子どもに、栄養は大切なことだと思っているから、親は、できるだけ努力をして栄養物を摂取させるよう心掛けていたようであった。

「欲しがりません勝つまでは」という言葉もこの頃さかんにいわれた言葉である。愛国行進曲、愛馬行進曲などは国を挙げて歌われるようになり、幼児たちまでが、あのむずかしい文句を、意味のわからぬまま声高らかに歌いもし、また歌わせもしたのであった。

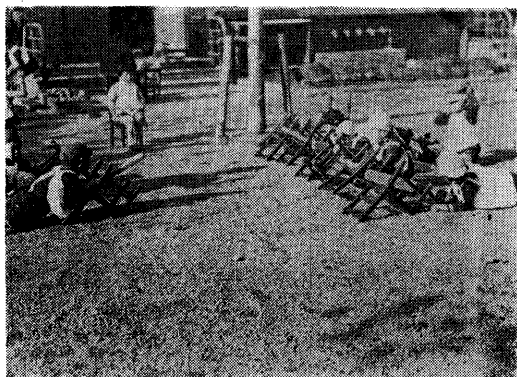
こうしたあいだにも、絶えず戦地への慰問袋の発送、陸軍病院へ傷病兵のお見舞などに出かけたのであった。

### 大東亜戦争——昭和十六年——

昭和十六年十二月八日「わが帝國は、本日未明、東太平洋において、米國と戦争状態に入れり」というラジオのニュースをきいた瞬間、一瞬どきっと胸がしめられる思いをしたのを、いまでも、まざまざと思いだす。あの強大な米國と干戈を交えて、果たしてわが國は勝てるだろうかと不安な気持ちが胸の中に起るのをどうすることもできなかった。この日の午後女高師の講堂で、「欧米國際關係」という題の下に鶴見祐輔氏の講演があつ

た。全校の職員生徒は一同この講演を聞いた。講演の内容は忘れてしまつて一つも覚えていないが、ただこの国際人鶴見さんが結ばれた最後の言葉「わが国の施策がよき実を結ぶことを心から祈るものである」という、この言葉が、沈痛なひびきをもつて私の心に印象づけられたのを覚えている。

この日は、天皇の名において大戦の詔勅が発せられ、国民一



椅子をつかつての戦争ごっこ  
(昭和18年頃)

同は恐れ多く感激してこれを奉読した。むずかしい漢字が用いられてあつた。こういう文章や字が世にあるのか、と思われるような難解なものだつた。さすがにこの詔勅は、幼児には読んできかせたりはしなかつた。ただ、この大東

亜戦争に入つてからは、国全体が、毎月の八日を、大詔奉戴日と定め、おとなの集会では詔勅を奉読した後は、何か戦争に関係のあるものとか、士気を高揚するようなことをするとか、強健な身体作りが先ず第一に必要なことと痛感されていた時代であつたから、身体の鍛練というを行なつていた。

わが園では、大詔奉戴日には、園児職員一同がゆうぎ室に集まり、倉橋主事司会の下に、次のようなことを、先生、子どもたちみんなで唱えていた。

「にっぽんはつよい このいくさにきつとかつ わたくしたちも きつと よいこになります」

その当時は心をこめて、この言葉を唱え、戦争に勝つようにと祈念したのであつた。いまこのことばを思いだしてみると、こんなことを子どもたちにまでいわせたなんて、何だか「断末魔のあがき」のような気がしないでもない。でもこの言葉は、倉橋先生が慎重に吟味されたものだつた。何でもその頃は、大政翼賛会というのがあつて、士気の高揚とか国の諸行事の企画や指導などを司つていたようで、大詔奉戴日当日に、子どもたちにいわたこの言葉も、当時の大政翼賛会から発せられたものに準拠したものだ、と倉橋先生は語つておられた。

わたくしたちのこのお茶の水幼稚園では、こうして一堂に会し、あの言葉を一同で唱和した後は、おとなの集会にならつて戦



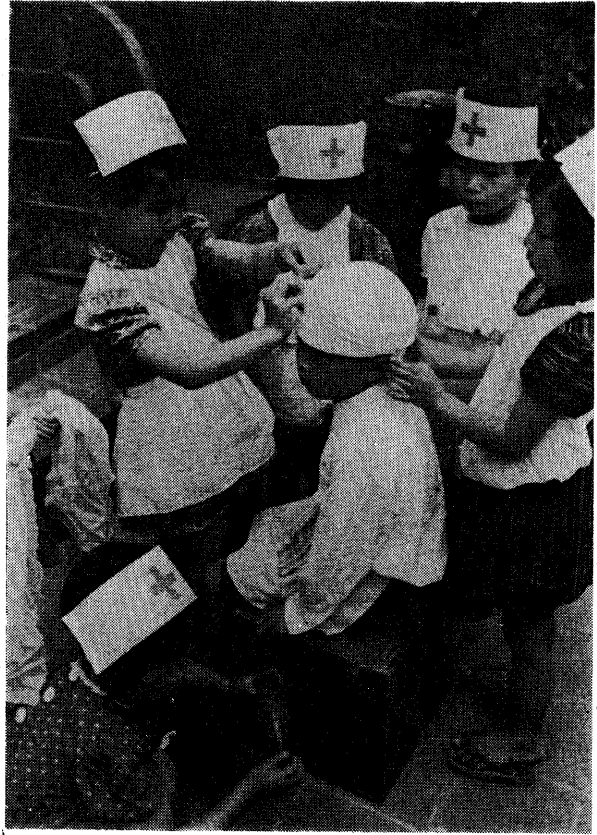
砂場では、いつもこのようにごん塚を掘って敵側とうちあいをする遊びをしていた（昭和18年頃）

争に関係のあることを行なっていた。例えば人形芝居「山名鉄雄君の出征」などというのを私が書き下して、やったこともあったし、園の卒業生で軍籍にある人などに来てもらって、兵隊さんたちの強いこと、軍馬の忠義な行ないなどを話してもらったりした。また、慰問袋を作って戦地へ送ることなどもしばしば行なった。それから、そのあとは、歩行訓練ということを必ずやったものだった。歩行訓練といっても、その当時といえども、のんきに学校の外を歩きまわることではできなかったから、学校の中を、園芸場の方からずっと校舎の外まわりを相当たくさん歩いたのであった。

その当時、よその幼稚園ではどういうことを行なっていたかはあまり知らないが、例えば靖国神社に程近い幼稚園では、大詔奉戴日には、靖国神社に必ず参拝し、そして神社の境内の清掃を行っていたというのをきいている。

このようにして、幼稚園で使う教材の資料にも、また、内容にも刻々と戦時色が浸透してきた。ただ園としては、敵対的な気持、敵が心を子どもたちの心に挑発するような言動は少しもしていなかった。戦地で戦っている兵隊さんや看護婦さんたちの労苦を偲ぶ、という方向で一貫していたように思う。

アメリカとの戦争は、同盟関係からかその辺のたしかなことにはわからないが、イギリスとも、オランダとも戦争関係になっ



女の児はこのように看護婦あそびをしていた（昭和18年頃）

曲や愛馬行進曲を歌いながら、日の丸の旗を手に校内を旗行列してまわった。また慰問の絵を描いたり、父兄もろとも慰問袋を作って陸海軍省に贈ったりした。

こうして戦捷に酔っている矢先き、三月に入って、初の空襲警報が発せられた。かねがね防空訓練をやったり、防毒マスクの付け方とか怪我の手当などの訓練や講習が行なわれていたので、こういうことのあることは予期していたはずではあったが、いざ空襲警報が発せられたとなると、急に身がひきしまる思いがした。

はじめての空襲警報は、朝の八時に発せられたので、前々からの家庭との連絡によりそのとき、まだ家を出ていない人は休園することとなっていたので、大部の幼児は自然休園したのであるが、少数の子どもたちは、はや登園していたので、私たちは大あわてをしたのを思いだす。緊急電話連絡をして、迎えにきてもらった。

この頃からは空襲警報が頻繁に発せられるようになり、国内は緊迫の度を加えてきた。

てしまったようだった。A E C Dラインとかいって、日本は遠まわりではあるが、四面楚歌という状態に陥ってしまった。

富強を誇る米英との戦争に、一抹の不安を感じざるを得なかったのに、開戦間もない二月の半ばに、シンガポール陥落という朗報が声高らかに報道された。国を挙げて、大東亜戦争戦捷第一次祝賀行事というのが行なわれた。子どもたちは愛国行進

わが園でも子どもたちを守ることを真剣に考えるようになってきた。幼児ひとりひとりが防空服装をもつこと、園内に防空壕を掘ること、子どもたちの空襲避難訓練を行なうこと、などが具体的にすすめられてきた。

防空服装は、そのころは国を挙げて、男女とも揃えていたので、幼児もそれに準拠して、幼児に適当したものを各家庭に作らせた。

防空壕は、現在の園庭の、山のふもとに二組が入れるぐらいのを三か所掘った。ちょうどいまの滑り台や、ジャンブルジムのあるあたりで、山の根もとによったところに掘ったのである。そのころは、人手に余裕はなかったから、毎日子どもたちが帰ったあと、私たち職員と保育実習科の学生とで掘った。一つの防空壕は、幼稚園玄関の広場の垣根に寄ったところに、あとの四組が入れるよう二か所掘ったのである。

空襲警報が出ると、みんなで防空頭巾をかぶって、できるだけすばやく、七〇人もの子どもたちが、一つのこの壕の中に入ったものだった。ことによったら、この子どもたちと、運命をともにすることになるかも知れない、などと思うと、ひとりひとりの子どもの顔を見ながら、いとおしくてならなかったものだった。幸いにそのような事態にもならず今日まで無事に過ごしてこられて、私の過去の記憶に悲しい汚点がつかなかった

ことは、思えばうれいことである。

空襲避難訓練。これは爆風をよける、という意味で、外でも内でも伏すことを練習した。笛の合図で、各組毎にできるだけ早く、床に伏したり、廊下に伏したりの稽古。こんなことをして、あの強大な爆弾や火炎の被害から逃れようとしたのを、いま思うと、私たちおとなが近隣総出で一列にならび、バケツリレーをして消火しようとしたあの愚にも似ている。それというのも、これまでは、近代兵器、化学兵器の強烈な偉力を、国全体が実際には知らなかったがためであらう。

この頃は、運動会のことでも、体練大会とよぶことになった。緊張、緊迫の気が、こういう呼び名ぐらいのところまでも及んできたのは、国のあせりのあらわれであったのであらう。

空襲警報は頻繁に発せられるようになり、戦争は次第に苛烈になってきた。

## 昭和十九年

昭和十九年に入ってから、隣組でも、各種の集団でも月ごと、防空訓練が行なわれるようになった。この年の五月には、都下の幼稚園の休園問題が話し合われるようになってきた。しかし、ここの幼稚園では、休園どころか、労働力も不足してき



た現在、少しでも国のお役に立たなければ、という考えから、六月一日からは朝の八時から午後の三時まで、と保育時間を延長した。

しかし空襲警報はますます頻繁になり、一日の中でも何回となく発せられるようになったので、夏休み明けの九月一日からは、通園時間十分を超えるものは全部休園のことにきまつた。

こうなると、毎日出てくる園児は極めて少数になってしまった。このような国の現況だから、幼稚園としてはできるだけ機能を發揮してお役に立たなければならぬし、いろいろな考えた末に次のようなことをすることになった。

即ち

・通園時間十分ぐらいの近隣の幼児を入園させること

・玉成舎にいる幼児を入園させて保育すること

という二つの新しい方法を採用することにした。

十分以内の近隣幼児の募集は、その頃各地域にあった隣り組の回覧板に出すことにした。

それから玉成舎というのは、本学から五分と離れていない大塚仲町にある松平子爵邸が、特設女子教員養成所の、子どもだけの未亡人の学生たちの寮に徴用されて玉成舎と称していたのである。戦争が苛烈になるにつれ、国内に多数の戦死者が出るようになり、遺家族も次第に増加してきた。国としては、この

ような遺家族を再教育して国のお役に立てようといういろいろな計画した中に、特設女子教員養成所というのもあった。これは、夫が戦死されて未亡人となった方々を教育して、中等教員の免許状を与え、中等学校の教員として、国のお役に立て、合わせて、その方たちに再起の道を与えるくらいでできたものである。この特設養成所は東京女子高等師範学校内に設けられ、女高師の校舎で、女高師の教授たちによって育成されていた。修業年限は二か年だったと思う。この玉成舎に入寮している未亡人の学生たちには、子持の人が多かった。六、七歳から二、三歳までの子ども連れであった。一人だけの人もあったし二人の子持もいた。

幼稚園では、近隣の子どもを入園させるのと同時に、これら未亡人たちの子どもを全部預かることにした。この玉成舎の子どもたちを、私たちは特設の子どもたちと呼んでいた。この特設の子どもたちは二歳半ぐらいから、小学校に入る前の年齢の子どもまでで、全部で二十七名ぐらいいたと思う。お母さんが、学校で勉強している間中預かるので、朝の八時から午後三時までで、母親の授業の都合では夕刻の五時ぐらいになることもしばしばあった。

純然たる託児所の機能を果たすためのものであった。この特設の幼児たちを一組にして、私が担当することになった。お部

屋は、いまの山の組のお部屋を当てた。保育室の半分は畳を敷き、昼食後はみな昼寝をさせることにした。なかなか寝ない子、寝つかれなくてごろごろまわったり、隣りの子どもにいたずらなどする子もあった。

一番年下のマーちゃんという女兒は二歳半ぐらいであったろうか、アツツ島で玉砕した軍人の一人娘であった。まわらぬ口で、「マーちゃんはね！ マーちゃんはね！」といていたあの顔が忘れられない。お母さんは特設を卒業されてからは、都立の高等女学校に奉職されたはず。東京都出身の人だった。

唇を外側にむくれるようにしておしゃべりする絹枝ちゃん。

特設の中では一番背が高く、年上だった和枝ちゃん、弟もいるのに、毎日お母さんとの別れぎわが悪くて一番手のかかった和枝ちゃん。

考えてみるとこの遺児たちはもうすでに二七、八歳にもなっている。いいお母さん、奥さんになってしあわせに暮らしていることであろう。

空襲警報は日毎に激しくなり昭和二十年の二月の大雪の日には、神田のあたりに爆弾が落とされ、その火災のために、園所在地であるこの大塚のあたりまで焼き灰が飛んできた。本屋さんの立ち並んでいる神田であるため、紙の焼き灰が物凄く、焼けても活字がはつきり読みとれるような大きな紙片の焼灰がとん

できた。爆弾が落ちたといっても、この頃のはまだ局部的なものであった。

それが忘れもできない、昭和二十年の三月九日に、下町の深川方面に大空襲があった。B 29が編隊をなして飛んで来て、どんだん爆弾を落としていく。火災は天をおおい、夜空に敵機の姿がはつきり見取れるほどだった。

私の担任に、ひどくお茶の水の幼稚園を信頼敬慕している家庭があった。常々、最後の一人になるまで、疎開などせず、この幼稚園に通わせつづけると明言していた父親であった。この父親が、三月の下町の、この空襲の惨状を自分の目で見てきて私に語った。

「先生、私は最後の一人になるまで、子どもはこの幼稚園のご厄介になるつもりでおりました。しかし、このたびの深川方面にあった空襲のあの惨状を目のあたりに見て、私の今までの考えは一変しました。子どもには、あんな目には会わせたくないから、やっぱり私たちもこれから国元へ疎開することにします」

こういって、この家族はこの空襲のあとすぐに、国元なる四国に疎開していった。

この深川方面に行なわれた大空襲は、すべての人々に大いなる衝激を与えた。

## 幼稚園 休園

国家危急の場合、それぞれの持場においてできるだけ最善の奉公をしようと、人々は覚悟していたときであったから、幼稚園でもこの時まで、保育時間の短縮などは一回も行なわなかったし、できるだけの人事を尽して光明のある日の来たらんことをひたすらに祈念しつづけてきたのであったが、ここここ及んでは「休園」を決定するの止むなきに至った。即ち昭和二十年三月十六日ついに休園となる。

空襲を受けて多くの人々が人命を失い、家財を失い、住む家を失った。人々は急速に疎開をはじめ、東京には住民がまばらになってしまった。そして小学校（その当時は国民学校といつた）も信州とか、新潟・山形・秋田・宮城などの各地方へ続々集団疎開をはじめた。

休園になった三月十六日は、幼稚園の卒業式を目前にひかえたときであった。卒業式をすませてから、などと考える余裕もないほどに世情は緊迫していたのであった。

この年の卒業幼児は、ついに卒業式を行なわなのまま、卒業ということになった。三月二十二日に、卒業証書を各家庭宛てに発送したのを覚えている。

「休園」を決定したとなると、諸官庁がわが園舎に疎開してくるようになり、園内の荷物の整理やもようがえの仕事がいそがしくなったので、職員は毎日出勤していた。

四月十四日には、またまた、大々的な空襲があり、都心部はほとんど壊滅されたといってもよい。この空襲で及川先生と同僚の上遠保母は遂に罹災され、及川先生は間もなく信州なる知人の許に疎開され、上遠保母は焼け残ったお蔵を改造してそこに住まわれ東京に残ることになった。

東京に残っている職員は倉橋主事、私、上遠の三名となった。週に一回出勤して顔を合わせた。この次に会うときには、誰が罹災しているだろう、などといって別れたものだった。この空襲のとき、幼稚園の屋上とお庭の山のところに四発ぐらいの焼夷弾が落ちたが、庭の方はちょっとした穴があいたぐらい、屋上の方もほとんど損傷はなかった。七月に入って、倉橋主事が姫路へ疎開された。この当時の職員は幼小の子女をかかえておられる方は職を辞されてどんどん疎開され、倉橋主事が疎開された後は、上遠保母と私だけが東京に居残ったのである。週に一回ぐらい出勤して園児の整理に当たっていた。

やがて園は全部、文部省に明け渡し、幼稚園は高等女学校の一室をもらってそこを事務所とし、ここで事務を扱ったのであった。

## 休戦——昭和二十年八月十五日——

昭和二十年八月十五日、ついに來たるべきものがきた。この日の正午、私は家にあつて、畑の野菜の手入れをしていたときであつた。休戦を宣せられる陛下の玉声を、ラジオをとおしてきいたとき涙を止めることができなかった。

流言飛語、世間ではいろいろの言説が流布されて、どうなるのか目前は暗然たるものであつた。進駐軍が入つてきて、教材や本などを、いちいち検査するかも知れない、珍しいものは取り上げられるかも知れない、婦女は外出が危険かも知れない、等々。

### 幼稚園再開の準備

休戦となるや倉橋主事が急ぎ帰京され、九月二十六日に、上遠、私、倉橋の三名が例の高等女学校の一室なる事務所に集まつて、幼稚園の再開準備にとりかかった。

このときの仕事は、

#### 保育案や談話集の検討

本園で立案している保育案や本園で教材用として編集発行

している談話集に軍国主義的なものはないか、幼児に敵がい心を挑発するような言葉や思想を盛りこんだものはないか、などということ、資料の一つ一つについて手分けして調べ、少しでもそういう気配の感じられるものは、別のところに取り除くことにした。この作業は、ずっと十一月十日の幼稚園の再開まで続けた。

次の仕事は、

町会や町会長宅へ依頼にまわる

幼稚園再開の挨拶と、幼児入園の輪旋方を依頼しに、わたくしどもの園の属している町会や町会長宅へ上遠保母と二人でまわつた。

#### 園舎の整理

疎開してきている官庁に、幼稚園再開のことを話して、園舎をあげてもらふようにした。このことは、休戦になり、諸所の官庁も元通りになる仕事ははじめられていたので、簡単にあげてもらふことができた。ただ、保育室でないところは、その後も、しばらくの間は疎開してきている人に使われていた。

#### 在園児に、幼稚園再開の通知発送

戦争が苛烈になって、疎開の希望者が出たときにも、また、幼稚園が休園になったときにも、事態がおさまつて東京

へ戻ってきた場合とか、幼稚園が再開される時は無条件で入園をさせる、ということをもって家庭に知らせてあったので、この点には問題がなかった。それで在園児には、すべてに幼稚園再開の通知を発送した。

#### 幼稚園の再開

昭和二十年十一月十日、幼稚園を再開。

このとき登園した幼児は、男児十四名、女児二十一名、と日誌に記されている。

疎開者は、ぼつり、ぼつりと帰京してくるので、少しずつ幼児がふえてくる。このときは、大体年齢別の組分けではあったが、教師が揃わないこともあって、四歳、五歳入り交っていたところもあった。

翌二十一年四月の新学期のはじまる頃は、疎開幼児もほとんど帰ってくるし、この年度の新入児もあるし、再開の折に、隣組をまわって募集した幼児もいたしするので、一組四十五名を数えた組もあった。四歳児三組、五歳児三組で、合計六組の編成である。池の組と林の組は二部であり、森・川・山・海の四組は一部である。一部と二部は附属小学校への連絡に異点があった。

ともかくにも幼稚園は再開された。私たちは、再開の幼稚園はどういう方針でやるのか、教育の内容はどのようになるの

か、など迷いつづけながら、幼児のことはもちろんのこと、園の施設、教具なども大半は取りこわされたり、失われたりしているの、毎日の保育が差し支えなく行なわれるよう、ただめくらめっぽうにうごきまわって、園の状態を落ちつかせることに懸命だった。混迷空白の一時期だったのである。

この年の三月には、アメリカから、第一次教育使節団が来日し、日本の教育の状況を視察して、マッカーサー元帥に報告した。それによって日本の教育の改善を図るために、各分野に立つての指導者が総司令部の招聘によって続々来日した。わが幼稚園界にはフェファナン女史がこられた。そして、女史を中心に、文部省、公私立の幼稚園教育の専門家、心理学者などによって委員会が構成され、これからのわが国の幼稚園教育の在り方を検討された。この委員会は、この検討研究の結果をまとめ、昭和二十三年に文部省の名において発行した。これが保育要領であってこれによってはじめて、わが国の幼稚園のあるべき姿というものが示されたのであった。

わが国で国家機関としての文部省から、幼稚園教育の在り方が示されたのはこれをはじめである。

この頃から、教育界には異常なまでの研究熱が澎湃として巻き起こって、それに刺激されてわが幼稚園界も、ただならぬ研究ブーム、カリキュラム熱が台頭してきた。そこで園では、水

曜日をおべんとうなしに決め、午後を研究会への出席とか、研究に当てることにしたのであった。

その後、教育界の一時的な研究過熱状態は次第におさまりの後は地道な研究をつづけるようになって現時に至っている。

またこの昭和二十一年からの教育改革につれて、教員の資格制度にも変革があり、一時は資格の切り替えや修得に、私たち教職にあるものは右往左往したのであった。

このようにして、社会一般がそうであるように、わが幼稚園界も年毎に盛んになり、現在はずべての点において戦前を遙かに凌駕するようになった。戦前の昭和十五年には、幼稚園数が国公私立合わせて二、〇四六、就園幼児数一七六、四二九名であつたものが、(青少年白書による)昭和四十年には国公私立計八、三九一、就園幼児数一、一三二、四三四名(文部省統計による)を数えるになっている。幼稚園は施設数においてますます隆盛になり、内容において一段と進歩の度を高めている。

園舎は近代的に整備され、教具や資材は質のよいもの、美しいもの、考えられたものなどが豊富に取り揃えられ、保育室は昔に比べれば、まことに絢爛たるものである。

子どもたちは、このよい教具や教材やおもちゃの中に埋もれて、飽くことのない活動をつづけている。

## 結 び

私はかくの如く変貌してきた幼稚園の現状の中で、自分の通ってきた道、辿ってきた道をふり返ってみて、深い感慨に耽ることがしばしばある。

教師として、この絢爛たる中で、子どもたちの育成に励むのが幸福か、また自分の過去のうちに、何も無かった時代に考えたり模索したりして、素朴なものをつくっては喜んだりした方が幸福か、この二つの命題を並べてはいつも考え込んでしまふ。

そして自分はこう考える。とにかくあの時代は、何も無かったから、子どもたちといっしょに作ることも楽しかった。明日の用意、その日の仕事の整理など、楽しくて、帰宅が夜の十一時に及んだこともしばしばあった。職業意識などは全然なく、夢中で打ち込んだことは、何ものにも比べることのできない楽しい毎日であった。自分にとっては、現在の絢爛たる中で指導するよりは、やっぱり楽しかった、と考えるのである。そして現在を羨みもしない悔いのない心境である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)